

## 6. 未熟児動脈管開存症

胎児は肺で呼吸をしていないので、心臓から肺へ向かうほとんどの血液は“動脈管”という血管を經由して大動脈から全身に流れています。赤ちゃんが生まれて肺で呼吸を始めると、心臓から肺への血流が増え、多くの場合、動脈管は自然閉鎖します。

ところが早産では、出生後も動脈管が開いたままで心不全や肺出血など、悪影響を及ぼすことがあります。治療は薬物治療（インドメタシン、イブプロフェン）が一般的ですが、効果がない時には手術で動脈管を閉じる場合もあります。

## 7. 未熟児網膜症

早産児は眼の網膜血管が発達する途中で生まれています。生後、血管は徐々に伸びていきますが、網膜血管が異常な伸び方をして問題を起こすことがあります。これが未熟児網膜症です。特に34週未満の早産児で注意が必要です。網膜レーザー治療を行うのが一般的ですが、ごく一部の赤ちゃんで急激に悪化し網膜剥離を起こしてしまう場合があり、硝子体手術という特別な手術が必要になることがあります。

## 8. 未熟児貧血

早産児は骨髄で血を作る力が未熟なことや、赤血球の材料である鉄が体内で欠乏しやすいことなどの理由で貧血になりやすい状態です。重症貧血の場合は赤血球輸血が必要ですが、輸血の回数を減らすため、早い段階から貧血に対する治療を開始します。治療には骨髄で赤血球を産生する力を増やすホルモンであるエリスロポイエチンの皮下注射や鉄剤の内服薬があります。内服薬は退院後も数ヶ月間継続することが多いです。

- 1か月間遅く退院して、家で一緒に過ごすことができたが、最初の一週間は夜中のうなり声すごくて、全然寝れなかった。とても心配だった。うなり声は成長するにつれてなくなり、小児科医にも相談できたので、安心した。定期的に病院で診てもらえたので、不安感をとりのぞくことができて、とてもよかった。(33週、1,980g出生、現在2歳)